

「 不登校理解と教育相談 」

1 はじめに

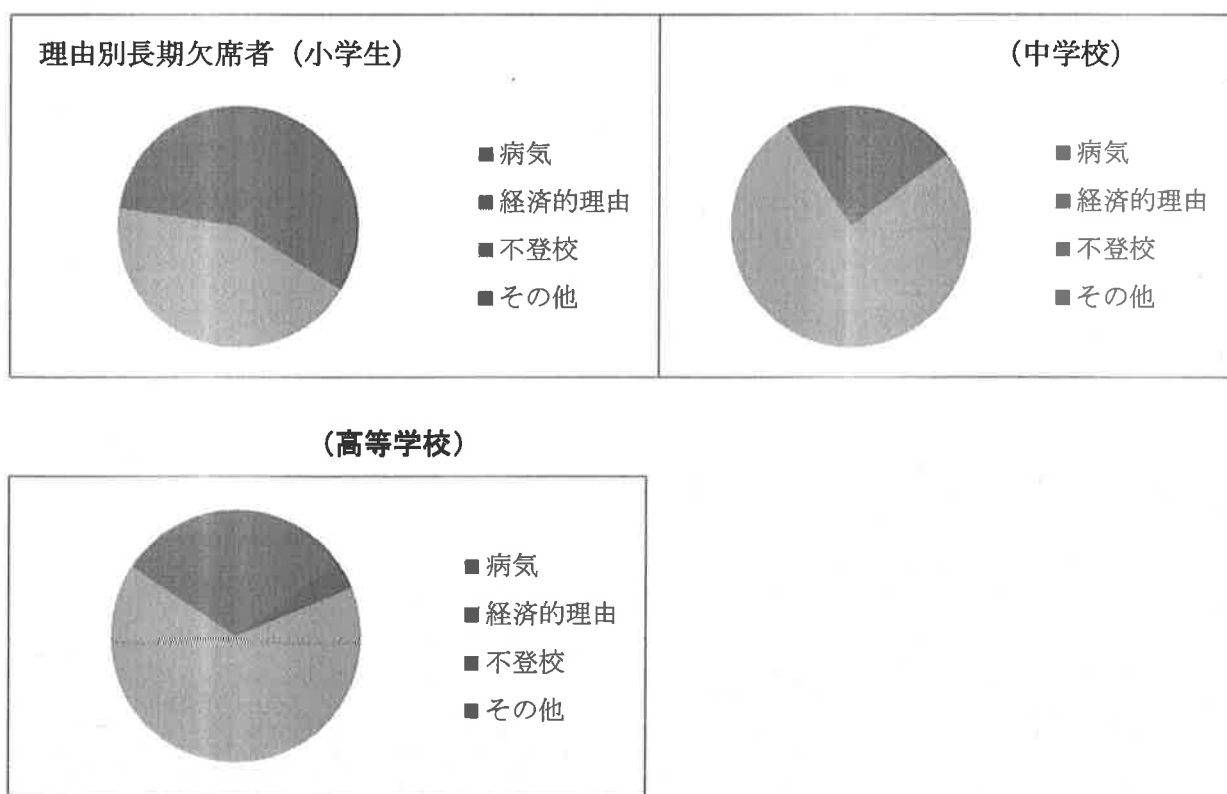
2 不登校とは（定義）

不登校は「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいは登校したくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いたもの（文部科学省）」

つまり年間30日以上欠席したもの（長期欠席者）の中で、病気・経済的理由・その他のをのぞいた数が不登校とされる

小学生2万4千人（0.4%）中学生9万5千人（2.7%）計約11万9千人である

高等学校における不登校生徒の数は約5万5千人（1.67%）である



3 不登校の問題

① 教育を受けられない・・・「学習」と「社会性（対人関係）」を学ぶ機会を失う

② 社会的ひきこもりとの関連

⇒ 本人の人生の問題

⇒ 日本全体の社会保障の問題

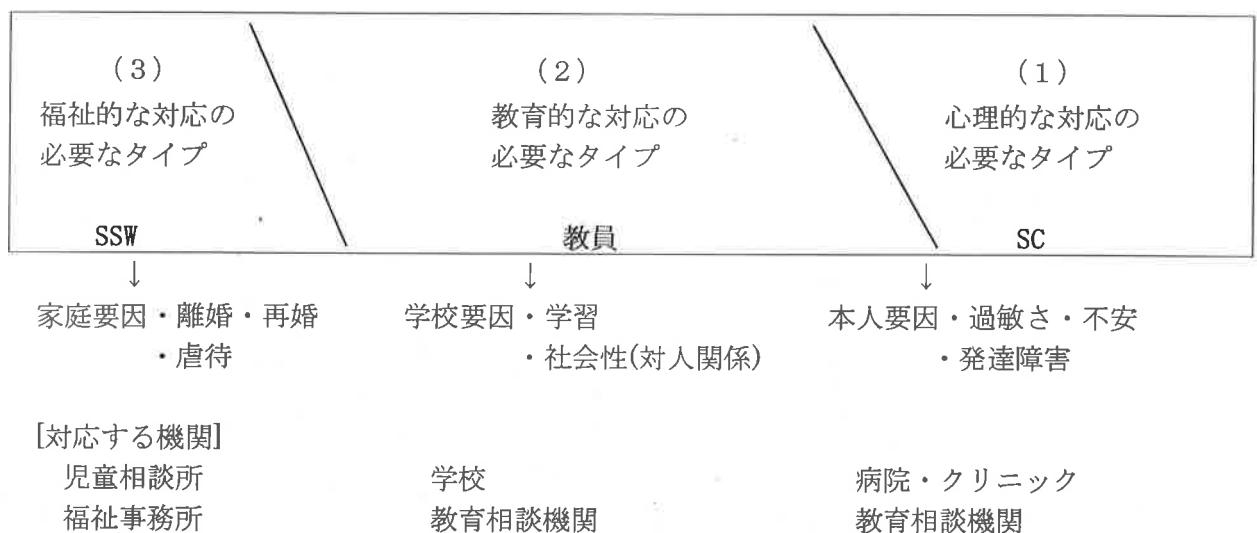
③ 不登校だけよりも長期欠席（長欠）を減らすことが重要

4 不登校の現状

全児童生徒数に占める不登校児童生徒数の割合（H26度）

- ・小学校 0.39%（前年度0.36） 25,866名
- ・中学校 2.76%（前年度2.69） 97,036名
- ・合計 1.21%（前年度1.17） 122,902名

5 不登校の全体像



6タイプ分けチェックリスト

タイプ分けチェックリスト

当てはまる・○ やや当てはまる・△ 当てはまらない・×

氏名 ()		小・中・高 () 年 男・女	
A 心理的要因をもつ急性型		B 心理的要因をもつ慢性型	
①感受性鋭く、深く悩む		①敏感すぎる(音・光・言葉・雰囲気)	
②まじめ、几帳面である		②おとなしく、目立たない	
③こだわりをもつ		③何事に対しても不安緊張が高い	
④友達はいる		④友達をつくるのが苦手	
⑤成績は悪くない		⑤学習の基礎でつまづく	
⑥思春期の不安・葛藤が強い		⑥心身ともに丈夫でない	
⑦神経症的な状態を示す		⑦頭痛、腹痛などを訴える	
⑧親に養育・保護能力はある		⑧親自身に不安や不全感がある	
⑨発達に問題は感じられない		⑨発達上の問題が感じられる(心理治療を要するレベル)	
C 教育的要因をもつ急性型		D 教育的要因をもつ慢性型	
①性格は明るく活発なほうである		①内気で自己主張が上手でない	
②勉強や運動を頑張っていた		②勉強が少しずつ遅れてきた	
③友達をつくる力がある		③友達関係が維持できない	
④家庭環境は健全である		④家庭が過保護・過干渉である	
⑤友達とのトラブルがある(いじめ等)		⑤学級崩壊を経験している	
⑥教師の強すぎる叱責、厳しすぎる指導		⑥教師の指導力不足(本人に・学級に)	
⑦学習の挫折(伸び悩み・急落・失敗)		⑦進級・入学等で環境の変化がある	
⑧発達上の問題はない		⑧発達に弱さがある(教育的支援で改善可能)	
E 福祉的要因をもつ急性型		F 福祉的要因をもつ慢性型	
①家庭生活の急激な変化があった(親の不仲・病気・死・離婚・再婚・リストラ)		①家庭崩壊がある	
②最近顔色が悪く、表情が暗くなった		②不安や不信の表情がある	
③最近投げやりな態度が目立った		③反抗や不服従がみられる	
④学習意欲が減退し、成績が急落した		④経済的に困窮している	
⑤短期間に適応力が低下した		⑤親が長期的病気である	
⑥親に保護をする精神的余裕がない		⑥親の保護能力(衣食住)が低い	
⑦最近服装の汚れや、忘れ物が目立った		⑦虐待が疑われる	
⑧発達上の問題はない		⑧発達上の問題がある(能力があっても育てていない)	

7 不登校の始まり方

(1) 急性型 (きっかけ・葛藤型)

それまで特別な不適應もなく過ごしてきた子どもが、何かの出来事をきっかけに急激に不適應状態に陥り不登校になるものです。思春期の自我獲得に伴う不安・葛藤や、学校生活での成績の急落や対人関係のトラブル、家族との死別や離婚・再婚など家庭状況の急変による深刻な喪失感や精神的混乱などがあります。

対応：きっかけを探り、解決する。心の傷を癒す (治療的対応)

- ・急激なダメージによりエネルギーが低下しているので、とりあえずの休養が必要。
- ・その間に、早急に状況把握が必要。前述した3つの要因のどれに当たるのか見立てる。
- ・この状況の子どもは本来的には学習や対人関係の力を持っているので、初期の対応を適切に行い関係をこじらせなければ、回復も急速に進むタイプです。

(2) 慢性型 (弱耐性型)

日ごろから休みがちだと思っていた子どもが、特に大きなきっかけが見あたらないのに休み始め、気がついたら不登校状態であったというものです。子ども自身が過敏さや体力の弱さを持ち、学習の遅れや対人関係を継続する力が弱かったり、家庭の養育に課題をもっている場合があります。

対応：気力やコントロールする力が弱いので、少しがんばらせたり、体験させて、力をつける (教育的対応)

- ・事態は長期的に進行してきているので、休養をとってもすぐには改善に結びつきません。むしろ少しでも現状を維持しつつ少しずつ向上していくような、継続的なかかわりが必要です。

8 登校刺激とは

(1) 「登校刺激」は薬のようなものであると考えます。使用法を誤ると害があります。しかし、適切に使えば驚くほどの効果があります。たしかに、体の具合が悪いときに薬を使わなくても治ることもあります。休養や保温により、自己治癒力で治る場合です。しかし、もし自己治癒しなければ、長期化し、場合によっては死に至ります。ですから、薬を上手に使う必要があります。正しい使用法を学ばなければなりません。

(2) 登校刺激の与え方のポイント

①小出しにする

できるだけ小さな段階に区切って提示することです。いきなり「明日から登校するかどうか決めなさい」というような大きな問題を突きつけると、子どもは混乱するばかりです。

② まずいときはすぐ引込める

登校刺激が有効であるかどうかは、その時の反応によって判断しなければなりません。「今度校外学習があるんだけど」と言ったとき、子どもが「ふーん」とか「行くかわかんない」などの反応をすればまずは大丈夫でしょう。

③効果については翌日確かめる

登校刺激になるような話題を持ち出したときは、たとえその時に調子が良さそうでも結果を確かめておくことが必要です。次の日に家庭に電話して、保護者に前日の様子を聞きます。特別に不機嫌でもなく、普通に過ごせていれば成功と言えます。

9 不登校の段階図

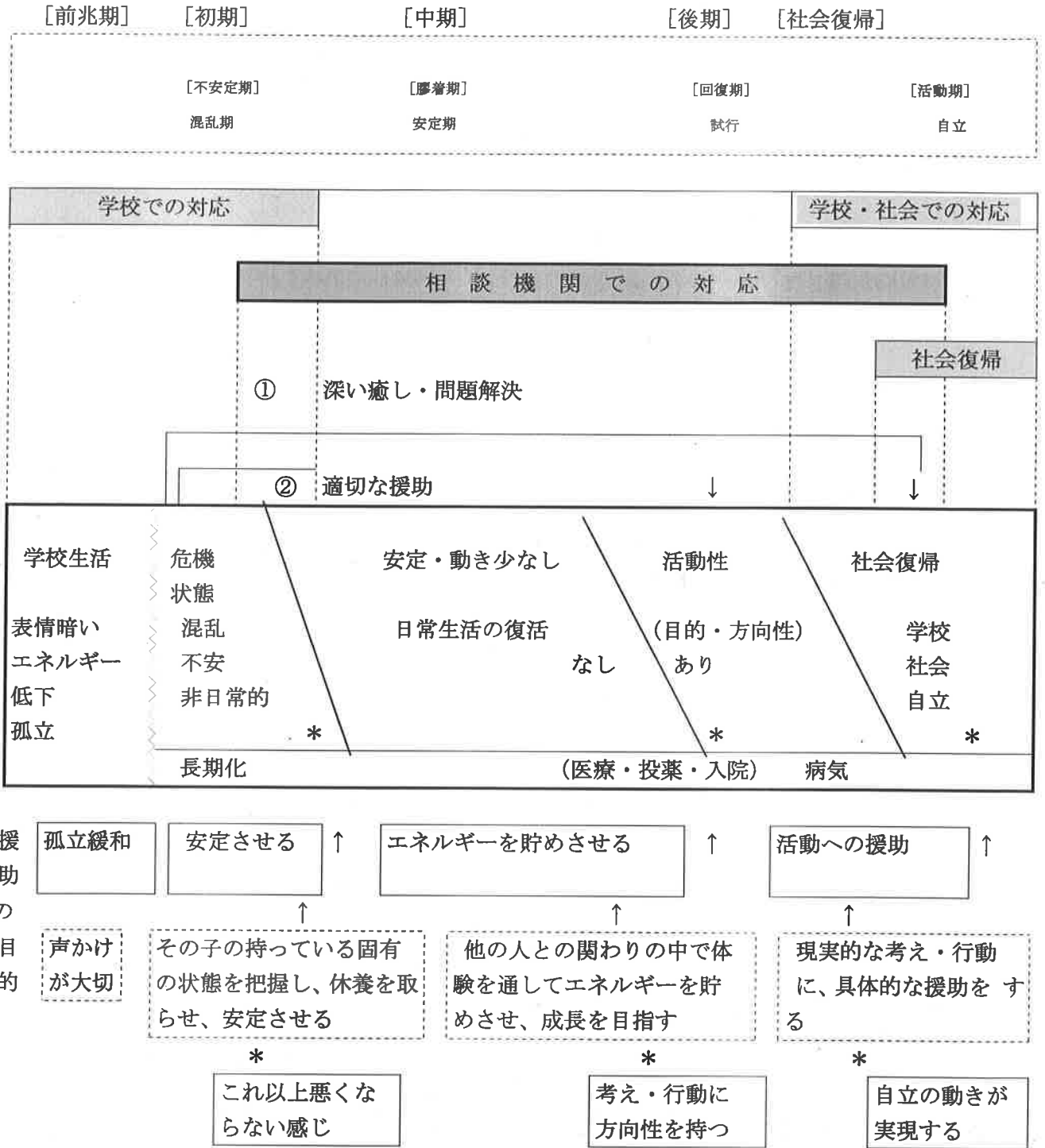


図1 不登校の回復段階 (2000. 1.20 小澤)

10 状態像チェックリスト

状態像チェックリスト

氏名 _____ 小・中・高 (年) 男・女	十分確認できる ・ ・ ・ ・ ・ ○ 確認できるが十分とはいえない △ 確認できない ・ ・ ・ ・ ・ ×				
(月/日)	/	/	/	/	/
(初期) 不安定・混乱期					
①腹痛・頭痛・発熱など身体症状がある					
②食欲・睡眠時間等の生活の乱れがある					
③物や人に当たるなど攻撃性がある					
④感情や行動のコントロールができない					
⑤気力が低下する					
⑥恐怖感が強く、人目を避け外出しない					
⑦学校の話題に激しい拒否感を示す					
↳ (これ以上悪くならない感じ) ⇐					
(中期) 膠着・安定期 ↓					
①気持ちが外に向き、活動の意欲が出る					
②趣味や遊びに関心がわく					
③気持ちを言葉で表現する					
④きっかけになった出来事に触れても混乱がない					
⑤同じことの繰り返しがなくなり膠着状態から脱す					
⑥手伝いや家族への気遣いをする					
⑦部屋の掃除や髪のカットなど整理・区切りをする					
⑧気の置けない友人に会う					
⑨子供の状態に配慮する先生に会える					
⑩教育センターや適応教室に通い始める					
↳ (思考・行動に方向性を持つ) ⇐					
(後期) 回復・試行期 ↓					
①自分を肯定する言葉が出てくる					
②進学や就職の話をするときに笑顔が現れる					
③アルバイトや学習を始める					
④担任や級友など学校関係者に会う					
⑤登校や進学・就職に向けて動き出す					
⑥不登校のことを振り返る					
↳ (自立の動きが実現する) ⇐					

*チェックリストの見方*初期は経過とともに○が減り、中期・後期は○が増える

11 回復を促進する関わりチェックリスト

回復促進要因チェックリスト

氏名 _____ 小・中・高 (年) 男・女	十分できている ・ ・ ・ ・ ・ ○ できているが十分とはいえない △ できていない ・ ・ ・ ・ ・ ×					
(月/日)	<table border="1" style="width: 100%; height: 20px;"> <tr> <td style="width: 20%; text-align: center;">/</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">/</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">/</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">/</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">/</td> </tr> </table>	/	/	/	/	/
/	/	/	/	/		
(初期) 安定させる						
①つらさに共感し、薬や保温の世話をする						
②食事の工夫や眠りやすいように配慮する						
③干渉を控える等心理的な刺激を減らす						
④本人に対して非難・強制しない						
⑤親が本人を守る姿勢を示す						
⑥迎え・訪問・電話等は、本人がいやがる場合は控える						
(中期) エネルギーを貯めさせる						
①子どもの言動に期待しすぎず、ゆとりを持って見守る						
②関心を持って一緒に活動する						
③きっかけになった事が語られた時はじっくり聴く						
④僅かなことでも認め、褒める						
⑤進路や学習の情報を上手に提供する						
⑥状況打開の見通しと希望を上手に与える						
⑦担任や友人から接触がある						
⑧相談員が学校と連携を取る						
(後期) 活動への援助						
①本人のすることに信頼感を持つ						
②進路・学習・就職などの情報を具体的に提供する						
③活動へ具体的援助をする						
④受入の態勢作りをする (学校・進路先)						
⑤振り返りにつきあい、納得していく援助をする						

参考図書

- ① 上手な登校刺激の与え方 ほんの森出版 小澤美代子著
- ② 続 上手な登校刺激の与え方 ほんの森出版 小澤美代子編著
- ③ 学校と家庭を結ぶ不登校対応 ぎょうせい 小澤美代子・土田雄一編著

12 学校教育相談の基本的考え方

教育 = 「教えること」と「育てること」

- ① 「治療」だけでなく「予防」「開発」
例えば、不登校は小学校で0.33% 長欠1.3、中学校で2.64% 長欠4.7
他の95%くらいは登校している
不適応の生徒だけでなく、登校している生徒を対象にしなければならない
- ② 「すべての子ども」に
「すべての教師」が
「すべての場面」で行なう
- ③ 「学業」 学習意欲、学習方法、学習意義
「進路」 生き方・在り方、適性
「軽い適応」 危機対応、健康面

13 教育相談系の業務

- ① 広報・企画
 - ・ 書籍や研修会の資料等の配布
 - ・ 年間計画、予算、次年度への展望
- ② 研修
 - ・ 講演会、演習、事例検討会
 - ・ 企画・運営（テーマ設定、講師依頼、司会進行）
- ③ コーディネーション（連携）
 - ・ 校内の連携（関係者のチーム）
 - ・ 校外の連携（関係機関を知る）
- ④ 相談（カウンセリング）
 - ・ 相談室の管理・運営
 - ・ 相談活動（本人、保護者、教員）